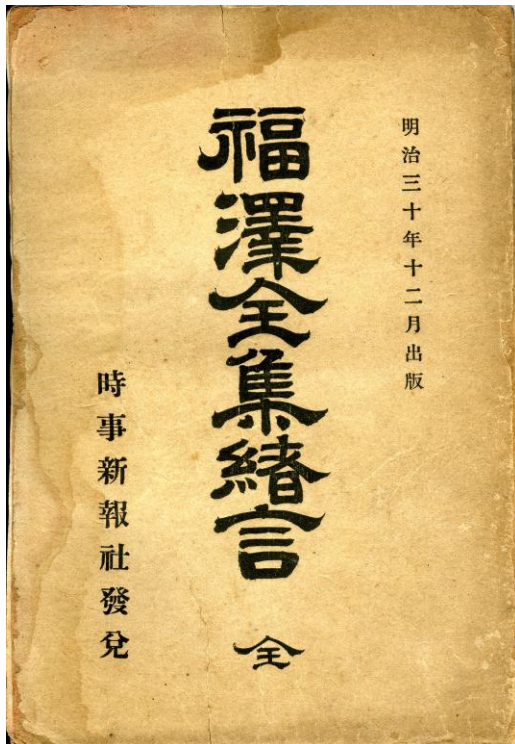


川本幸民と三田「新時代への架け橋」



福沢諭吉と川本幸民の出会いが
記された『福澤全集諸言』

今年には三田が生んだ化学の祖、川本幸民(文化7(1810)年生まれ)の生誕200年です。「化学」者として全国に知られた川本幸民ですが、彼と三田との直接の関わりを示す数少ない歴史資料からは別の側面もみえてきます。

『三田市史』第6巻の1号史料には安政6(1859)年8月、時の三田藩主九鬼^{きよたか}精隆の容態が江戸で重篤となった際に、当時薩摩藩に籍があった川本幸民を通じて、同藩籍で西洋医師として初の幕府の典医となった戸塚^{とつか}静海^{せいかい}の往診を仰いだことが記されています。幸民自身も医家であり西洋医術にも接していたと思われませんが、ここでは彼は三田藩と当時の先端で最高と位置付けられた医術とをつなぐ役割を果たしています。

川本幸民は、かの福沢諭吉から「御地(三田)には川本氏あり」と評されています(市史第5巻21号九鬼隆義あて書簡)。その趣旨は新しい時代に必要な英語の原書講読をおこなう上で、英文解釈に卓越した能力をもつ幸民を擁する三田がうらやましいという意味です。よく知られる通り、川本幸民は幕府の外国文献研究機関である蛮書調所(開成所)の教授を務めました。当時独自に英語文献を研究していた福沢諭吉は、初めての翻訳書である「華英通語」にまつわる回顧のなかで、新時代にあるべき翻訳に対する心構えは「洋学界自由思想の大家」である「川本先生」から学んだと述べています(『福澤全集緒言』)。福沢諭吉は川本幸民に心から敬服していました。幕末・維新时期における三田藩政の先進的な取り組みの背景には福沢諭吉の示唆があったと考えられます(市史第5巻)、その意味で川本幸民は三田と福沢の先進思想とをつなぐ役割を果たし、その背景には彼のもつ卓越した語学力と「自由思想」があったのです。

このようにみると川本幸民は、その語学力と未知の世界に対する好奇心、科学的・合理的な姿勢をもって、内陸のまち三田と新しい時代との架け橋としての役割を果たしてくれたと言えそうです。彼のこういった業績にも学ぶべきものが多いのではないのでしょうか。